

(別紙2)

審査の結果の要旨

氏名 多田 蔵人

本論は永井荷風の主要作を個別に検討し、従来「江戸趣味」への韜晦、と評されてきたものの内実を、現実により深く関わろうとする小説家の方法意識、という観点からあらためて再検討し、新たな荷風像を提起したものである。

構成は全九章からなる。第一章は初期作品を取り上げ、同時代の「悲惨小説」の影響を受けながらも重要な差違が内在している点に着目し、暗黒面を語ろうとして語りきれぬ、まさにその様態にこそ『地獄の花』の独創があったと結論づけられている。第二章は『狐』を扱い、江戸時代の民俗的慣習と新時代の論理とに引き裂かれる語りのありようが具体的に明らかにされている。第三章は『すみだ川』論で、「江戸」の再現でもなく、新時代の風俗でもない「第三の空間」が創造されていること、同時にまた、江戸期のテキストが引用されながらもそれが登場人物の生き方と齟齬をきたしている点に、意図された、方法としてのアナクロニズムの内在している事実が明らかにされている。第四章は『冷笑』論で、登場人物の主張が上滑りしていく様態を通して、虚無と滅びのテーマが浮き彫りにされてくる構造が明らかにされている。第五章は『戯作者の死』論で、主人公柳亭種彦が天保の改革と戯作者の論理との狭間に揺れる中で、作品の主題が次第に転落の美学へと傾斜していく様態が明らかにされている。第六章は『雨瀟瀟』論で、俳人横井也有を模しながらも文体がそこから逸脱していくこと、またその事実が江戸趣味に生きようとして挫折する主人公の姿に重なってくる点が明らかにされている。「江戸」と現代に引き裂かれるこうしたアンビバレントな様態こそが荷風のめざしたものであり、それを通して定型的な文明批評そのものの無効性があらわになる、という指摘は、本論全体の趣旨を集約的に示したものと傾聴に値する。

第七章の『雪解』論においては、引用される「江戸」の形象と物語内容との齟齬を通して、また第八章の『つゆのあとさき』論においては、カフェと花柳街という、新旧二つの世界のアナクロニズムを通して、常に変動し続ける都市の様相、あるいはまた、現実とは別個の幻想都市が浮上してくる様相が明らかにされている。第九章『溼東綺譚』論においては、江戸を思わせる「過去の幻影」と、作中作の中でしたたかに現実を生きる姿とが共に女性主人公に求められ、結果的にその矛盾によって作品が破綻していく姿を通して、言語表現の限界を冷徹に見据える作者の姿が明らかにされている。

総じて文明批評家として固定化された従来の永井荷風像に異議申し立てを行おうとする意図が先行し、解釈がやや強引になっている箇所も見受けられるが、江戸期の諸テキストとの精緻な照合を通して、「江戸」でも「東京」でもない「第三の空間」が創造されていく過程を実証的に明らかにし得た点は高い評価に値する。

以上の点から本審査委員会は、本論文が博士(文学)の学位に値するとの結論に達した。